

ブーラン元神父 ——オカルティスト？ 悪魔主義者？——

—マリア派異端とユイスマンス(その2)¹—

大野英士

0.

ジョゼフ=アントワヌ・ブーラン Joseph-Antoine Boullan (1824-1893) 神父, 別名ジョアネ博士。若い頃は、一部の聖職者やカトリック信者の間では、神秘主義に通じた碩学として尊敬を集め、また、有能な祓魔師すなわち、^{エグゾルシスト}悪魔祓い師として信望があったが、ユイスマンスが彼と出会った1889年には、すでにローマ教皇から破門され、リヨンに隠棲して、「慈悲の御業」ないし「エリーのカルメル会」という、信者数せいぜい10人にすぎぬ異端のセクトを率いていた。65歳と、当時としては、すでにかなりの高齢に達し、ほとんど世間からは忘れられた存在だった。この奇矯な人物が、すでに引用したように「19世紀のもっとも興味深い還俗神父」²と言われるほどの影響をのこしたについては、彼がユイスマンスの『彼方』*Là-Bas* (1891), 『出発』*En Route* (1895), 『大伽藍』*La Cathédrale* (1898), 『スヒーダムの聖女リドヴィナ』(邦題『腐乱の華』) *Sainte Lydwine de Schidam* (1901), およびモーリス・ヴァレス Maurice Barrès (1862-1923) の『精霊の息吹く丘』*La Colline inspirée* (1913) にモデルやインスピレーションを提供したというのが大きい。ただ、彼の数奇といえないこともない閥歴や、奇妙な異端「思想」がユイスマンスにどのように受容されたかを知ることは、ブーランがこれら文学者に与えた影響にとどまらず、19世紀から20世紀の初頭に起きたと推認される認識論的な布置の移動に関しても、格好の指標を提供してくれるように思われる。本稿では、ブーランがユイスマンスに出会う以前のブーランの生涯を足早にたどってみたい。

1.

聖母マリアやその他「聖なる存在」の相次ぐ「出現」³で騒がしい19世紀キリスト教社会の周縁で生きたこの奇怪な人物⁴は1824年2月18日、フランス南西部に位置するタルン=エ=ガロンヌ県サン=ボルキエに生まれた。現在はミディ=ピレネー地域圏の中にあるが、古くは北フランスとは独立した文化圏を形成していたオック語(ラング・ドック)文化圏に属し、11世紀から13世紀にかけてはカタリ派の異端が栄えたところである。1858年に聖母が出現することになるルルドも近い。

ブーランの宗教家としてのスタートは当時としてはむしろエリートといっても過言ではない。生まれ故郷にちかいモントーバンの神学校でラテン語とキリスト教を修め、モントーバンのサン=ジャン教区で助祭を務めたのち、ローマにおもむき「優秀な成績で」神学博士号を取得している。フランスに帰国後にはアルザス地方のトロワ=ゼピにあるプレシュー=サン(聖血)修道院の^{シュベリユール}上長者に任命されたという⁵。

けれどもブーランの関心は最初から神の天啓や奇跡、「超自然的なもの」に向けられていた。その中でも、最も興味を引かれたのは聖母マリア信仰だった。彼はローマ滞在中に習得したイタリア語の学力を生かして、聖母マリアについて書かれた何冊かのイタリア語の著作をフランス語に訳した。この中には、ボナベントゥーレ・アマデオ・デ・チューザレ神父の書いた『聖母マリアの生涯』⁶が含まれている。これは、もともと17世紀のスペインの尊者アグレダのマリア Maria de Ágreda (fr: Marie d'Agréda, 1602-1665)が書いた『神の都市』*Mística Ciudad de Dios* (1660)⁷を要約したものであったらしい。現代のカトリック系の研究者は、この書物の中には相当異端的な内容が含まれており、出版当初から聖職者の間で物議を醸したと指摘しているが⁸、当時の読者への受けは悪くなかったようで、1868年までに6版を重ねている。

1854年、ブーランは教区に属さない無役の司祭としてパリに出てきたらしい⁹。1855年から56年にかけて、彼は相次いで翻訳その他の著作を発表する傍ら、ピヨン・ド・テュリ神父が編集し、カトリックの僧侶や信者の間にはかなりの読者を持っていた『ロジエ・ド・マリー（マリアのバラの木）』*Rosier de Marie*を始め、複数の宗教雑誌に寄稿している。

II.

そうこうするうち、ブーランは、彼の聖母マリア信仰、特にラ・サレットの「出現」¹⁰に寄せる熱い思い入れが機縁となり、1856年、ソワッソンにあるサン＝トーマ・ド・ヴィルヌーヴ修道院の助修女アデル・シュヴァリエ Adèle Chevalier という若い女性と知り合うことになった。彼女は原因不明の病で視力を失った他、肺の鬱血に悩んでいたが、1854年、ラ・サレットの聖母のおかげで「奇跡的に」病が治癒した。アデル・シュヴァリエはこの病からの回復を境に、不思議な声を耳にするようになった。それはマリアからのお告げだった。声は、彼女に「修復」に捧げられる新しい修道会を創立するように命じた。「修復」とは既に別の箇所でも述べたように¹¹、カトリシズムで、神に加えられた不信心や瀆神の罪を特別な祈りや贖罪の勤行によって取り除く行為を指している。

少なくとも最初の頃、彼女の周囲にいた聖職者達が、彼女の身に起こった奇跡や、聖母からのお告げが本当かどうか疑った形跡はない。ソワッソンの司教から調査のために派遣された副司教も報告書に「彼女が視力を回復し、かくも重篤な肺の病が快癒した状況を慎重に考慮したうえからは、躊躇なく神の母の超自然的な介入のあったことを信ずるものである」としたためている¹²。また彼女のお告げの内容は1857年「救いの叫び」*Cri de Salut*の題のもとに匿名で出版され、後にJ.-M. キュリック神父の『予言の声』¹³の中に納められた。

1856年、アデル・シュヴァリエは、サン＝トーマ・ド・ヴィルヌーヴ修道院を離れてノートル＝ダム・ド・ラ・サレット教会におもむいた。ラ・サレットの上長者は、この修道女の精神的な指導を、該博な神学上の知識ゆえに、教会関係者の間ではちょっとは知られた存在になっていたブーラン神父にゆだねることにした。ブーランはこのうら若い修道女との出会いを文字通り聖母のお引き合わせと思ったらしい。

ブーランは1856年、早速ローマに赴き、新しい修道会を設立する許可を取ろうとした。この時ブーランは、アデル・シュヴァリエのほかに、もう一人女を伴っている。マリー＝マドレーヌ・ロッシュ Marie Madelaine Roche という、やはり神の声を聞く特殊な能力をもった幻視者で、すでに数年

前から「修復」の使命に身を捧げていた。しかし、ローマ行きの結果は期待を裏切るものだった。アデル・シュヴァリエが神の言うままに書き取ったと主張していた未来の修道院の規則の中に、聖フランソワ・ド・サル Saint François de Sales (1567-1622)¹⁴ から剽窃した文章があることが発見されたからである。ブーランは失敗を取り繕って、なんとか教皇ピウス 9 世 Pius IX (fr: Pie IX, 1792-1878) との謁見にこぎつけたが、教皇からは「修復」について、曖昧な励ましの言葉をいただいただけだった。しかし、こんなことでくじけるブーランではなかった。フランスに戻ると、彼はアデル・シュヴァリエを始め、数人の協力者の助けをえて「魂の修復の御業」L'Œuvre de la Réparation des Âmes と称する新しい修道会をセーヴルに設立した。また同時にブーランは、『アナル・デュ・サセルドス (聖職年報)』*Annales du Sacerdoce*¹⁵ と題する雑誌を刊行し、彼が構想する「神秘的な」修復の学説を精力的に説きはじめた。

III.

しかし、ブーランとアデル・シュヴァリエの伝道事業は、スキャンダラスかつ冒瀆的な理由で開始早々破綻の道をたどった。ヴェルサイユの司教のもとに、修道会に属するカトリーヌ・ヴァン・グリーク Catherine Van Griecke という名の修道女から、修道院の内部で、修道女に対していかがわしい「治療」を施しているという告発が、修道院を管轄するヴェルサイユ司教マビユーヌ下 Mabile, évêque de Versailles のもとに寄せられたのだ。事件から 20 年後、ブーラン教団を告発した書物の中で、シャルル・ソヴェストルは次のように書いている。

まもなく、新設された修道会の内部で前代未聞の行為が行われているという評判がたった。ブーラン神父が「悪魔に由来する」病の治療を行っているというのである。彼が処方した興味深い治療法の幾つかの例を挙げてみよう。悪魔に悩まされていたある修道女に対して悪魔祓いを行うため、ブーラン神父は彼女の口の中に唾を吐きかけた。別の修道女には、自分の尿とシュヴァリエ修道女の尿を混ぜたものを飲ませた。修道女達はブーランとシュヴァリエの尿を捨てないで取っておくように命じられていた。また、もう一人の修道女には大便を混ぜた湿布を貼るように命じた。¹⁶

修道女カトリーヌはまもなく前言を取り消したため、ヴェルサイユ司教の調査は途中で打ち切られた。しかし、悪い噂のたった修道会はセヌ＝エ＝オワーズ県のトリエルに、次いでヴォーへと移転を余儀なくされた。

こうしたエピソードに加えて、この時期のブーランの行動についてはさらに陰惨なもう一つの事件が伝えられている。嬰兒殺しである。

アデル・シュヴァリエはどうやらブーランの愛人になっていたらしい。ブーラン自身が数年後、教皇庁の審問の際に告白したところによれば、1858 年 12 月 8 日、ブーランはアデルが産み落としたばかりの自身の子供を密かに殺害したのだという。ただ少なくとも事件当時、このおぞましい犯罪は当局に発覚することはなく文字通り闇から闇へと葬られた。

ブーラン、アデルが司直の手に落ちたのは、ある意味でつまらない詐欺と公序良俗壊乱の廉である。

複数の被害者が、ブーランとアデルを裁判所に告発したのである。被害者の一人は、サン＝ガブリエル修道院の上長者シメオン神父 abbé Siméon である。彼は信者に寄付を呼びかけ、当時のお金で2万フランという大金を集めることに成功した。教会のつながりでこれを知ったアデル・シュヴァリエは、聖母マリアからお告げを受けたと偽って、シメオン神父にそのお金を「修復の御業」修道会に寄託するようすすめた。シメオン神父は、お金の寄託に際して「修復の御業」修道院が本拠を置く建物を抵当として差し出すという条件を付けていた。告発の理由は、ブーランと、アデルが基金を受け取りながら、この条件を果たさなかったというものである。ブーランとアデルは、1869年、軽罪裁判所に出頭を命じられた。二人は修道女に対して奇妙な治療を行ったことは特に否定しなかった。自らの信仰に従って正しい治療行為を行ったまで、と主張したのである。ただ、詐欺行為については激しくこれを否定した。彼らは「死の床にあるがごとく、死刑執行人を目の前にしているがごとく」¹⁷、断固とした口調で、間違いなくアデル・シュヴァリエは聖母からお告げを受けたのだと主張してやまなかった。

裁判の結果は彼らには厳しいものだった。軽罪裁判所は、検察局から出されていた風俗壊乱の論告については免訴としたが、詐欺罪でブーランとアデル・シュヴァリエ双方に3年の懲役刑を言い渡した。判決文は彼らが主張する「聖母のお告げ」も、またひいてはブーランの「教説」も、「迷信にもとづく、荒唐無稽な」ものと切って捨てた。この判決を受けて、アデル・シュヴァリエはレンヌの刑務所に収監された。ブーランは最初はサント＝プラージュ、次いでルーアンのボンヌ＝ヌーヴェル刑務所で、1861年から64年まで刑に服した。

奇跡^{ラ・ミラキュレ}の女と呼ばれ、ブーランの子供まで産んだ修道女アデル・シュヴァリエは、刑期を終えた後、どうなったのか？ 彼女の足跡はぶつりと途絶え、ブーランの伝記作者の記述から完全に姿を消す。少なくとも彼女がその後再興されたブーランの教団に合流した形跡はない。

IV.

一方、ブーランの方は、自由を回復した後、1868年に、信者や聖職者の信仰と風俗の問題を扱うためローマ教皇庁に設けられた検邪聖省に出頭して、自らが犯した罪について教会側からの審理を受けた。ブーランの活動が三つの教区にまたがっていたため、フランス国内の教会組織では、それぞれの権限の関係から彼の行いを裁くことができなかったのである。

翌1869年5月、ブーランは検邪聖省に対して、嬰兒殺しを含む自らの「罪」を洗いざらい告白する手記をしたためた。ローズ・ピンクの用紙が使われたので、この文書は、研究者の間で「カイエ・ローズ」と呼ばれている。ブーランの死後ユイスマンスは彼の遺品の中からこの手記を見だし、ブーランの「犯罪」を発見したと言われている。この文書は、さらに後年、ユイスマンスが亡くなって以降、1930年に至って、ブーランに関係する他の資料と合わせて、ユイスマンスの友人でイスラム学の権威として高名なルイ・マシニョン Louis Massignon (1883-1962) の手で、ヴァチカン図書館に寄贈され、禁書とされた。カトリック禁書目録に載った書物については、時代と共に徐々に禁止が解除され、1929年までに登録された資料に関してはすでに閲覧が可能である。しかし、たまたま禁書目録入りが1930年であることから、ブーラン文書は一般の閲覧は禁じられている。筆者も1998年、博士論文の指導教官であったジュリア・クリステヴァ教授の紹介状とともに、パリ駐在^{ヌンシオ}教皇大使

に書状を書き、ブーラン文書の閲覧許可を申請したが、返答すらなかったという経緯がある。

ただし、ユイスマンスの周囲の人間や、研究者が非難してやまないこの嬰兒殺しの事実関係については、不明な点が多い。この問題については後で改めて検討してみることにしよう。

確かなことは、この段階では、ブーランはカトリック教会から破門されなかったということだ。彼は罪を告白し教会は悔悛の情を認め「赦免」した。ただし、ブーランはこの時司祭の権限を回復したと言っているが、どうやらそうした事実はなかったようだ。

V.

ブーランはパリに戻る以前の1869年から、『19世紀聖性年報』*Annales de la Sainteté au XIX^e siècle*¹⁸と題される新しい宗教雑誌の主要な執筆者になっていた。『聖性年報』は、戦争やパリ・コミュンでフランス国内が混乱した1870年を除いて、1875年まで、毎月1冊ずつ発行されたが、まもなく実質的な執筆者はブーラン一人になったようだ。つまり、1年12分冊、総ページ数1000ページに達するこの雑誌を、ブーランはさまざまに筆名を変えて、7年間ほぼ一人で書き続けていたらしい。内容は、19世紀、つまり当時の現代に「生き、そして亡くなった」聖者、福者、尊者の伝記を集めたものである。聖者伝そのものも、とくに聖母マリアにまつわる奇跡譚に異様に大きな役割が与えられる一方、この世界がいかに悪魔の脅威にさらされ、彼らの災いに満ちているかが強調されるなど、オカルト的色彩が強いばかりでなく、本編の間に織り込まれたコラムを通じて、ブーランは特異な「修復」概念を中心とする彼の「神学」を布教していた。

すでに彼は1869年、神に捧げる「修復」を目的とし、ラ・サレットの秘密と聖母マリア崇拜と密接な関わりをもつ新しい宗教結社「マリアの御業」を立ち上げていた。しかし、ローマ教会との決裂の時期は迫っていた。

新しい教団においても、ブーランは「悪魔祓い」や催眠術を用いた「治療」を繰り返していた。教義にも正統信仰が容認できない奇妙な教えがたくさんあった。ついに1875年2月1日、パリ大司教ギベール Joseph-Hyppolyte Guibert (1802-1886) はブーランを異端として断罪し、キリスト教会から追放した。

ユイスマンス研究者で、自身もドミニコ会の修道士だったモーリス・M・ベルヴァルは驚きを隠さない。

今日、『聖性年報』を読むと、この雑誌がこんなに長く出版が許可されていたことに驚かされる。神学上の教説には最初から問題の箇所が少なからずみられる。¹⁹

しかし、19世紀の社会の中には、聖職者の中ですら、ブーランの教説の正統性に特段の疑義をもたず、そのまま受け入れる心理的、思想的な素地があったことも事実だ。実際、『聖性年報』は教会関係者の間に多くの読者を獲得していた。教会の中で信者の尊敬を集める「まっとうな」神父の中にも、ブーランの教説をまったく妥当な思想と考える人間が少なからずいたのだ。19世紀後半広く読まれた『内的な祈りの恵み』*Les grâces de la prière intérieure*の著者オーギュスタン・ブーラン Augustin François Poulain (1836-1919) や、文学者レオン・ブロワ Léon Bloy (1846-1917) の精

神的な指導者だったタルディフ・ド・モワドレー神父 Tardif de Moidrey (1828-1879) などともそうした人びとの中に数えられる。²⁰

VI.

さて、ローマ教会から離れたブーランは、その後すぐ、ノルマンディー地方ティリー＝シュル＝スールに本拠を置く異端宗派「慈悲の御業」の開祖で、幻視者のユージェーヌ・ヴァントラ Pierre-Michel-Élie Eugène Vintras (1807-1875) に接近した。

「慈悲の御業」はそれ自体、神的な存在の幻視や、精霊崇拜、千年王国説、ナウンドルフ派のオカルト神秘主義的政治運動などの交点に出現した奇妙な小セクトである。ナウンドルフ派の活動家フェルナン・ジェフロア Fernand Geoffroy なる男から水車小屋の番を任されていた元紙作りの若い職人ユージェーヌ・ヴァントラのもとに、1839年8月9日から、「檻樓をまとった老人」の姿をした大天使ミカエルが現れ、彼をピエール＝ミシェルと呼んで神からの啓示を伝えた。ピエール＝ミシェルはヴァントラの名前の一部だが、普段はユージェーヌと呼ばれていて、この名前を知っている人は周囲にはいないはずだった。フェルナン・ジェフロアはブッシュ夫人 M^{me} Bouche にヴァントラを引き合わせた。彼女は、18世紀にさかのぼる幻視——神的な存在の出現——の伝統を継ぎ、当時パリで「福音の3人のマリア」という、文字通り女性3人からなる宗教セクトを組織していた「幻視者」である。ブッシュ夫人はヴァントラこそが洗礼者ヨハネが到来を告知した預言者だと宣言し、直ちにセクトの権能をすべてヴァントラに譲った。この時から、ヴァントラは、ピエール＝ミシエルの名で新セクト「慈悲の御業」の教祖となった。

神からの天啓は、その後、恍惚状態になったヴァントラに毎晩のように訪れ、その内容はヴァントラや彼の周辺の信者の手で書き取られ、セクトの神学者シャルヴォーズ神父 abbé Charvoz によってかなりまとまった体系へとまとめ上げられた。この体系については、ブーランの教説に包摂されるので、詳しくは後で述べるが、神の怒りを強調する終末観、精霊の支配する千年王国の到来、王太子生存説にもとづく神聖な王の君臨、聖母マリア信仰と精霊信仰の奇妙な結合など、オカルト神秘主義にかぶれた19世紀のカトリック＝王党派が抱いていた「教理」の多くを寄せ集めたものである。ヴァントラは、栄光のキリストの君臨する精霊の時代を準備するべく天から遣わされた預言者エリアの再来なのである。

特に注意すべきは、この教団が聖母マリアに特別な関心を寄せ、カトリック教会が公認する以前から「聖母マリアの無原罪の御宿り」^{インマキュレ・コンセプション}を主張していたことである。また信者は聖母マリアの特別の加護を受けるため、カトリーヌ・ラブレ Catherine Labouré (1806-1876) の奇跡のメダル²¹と同様のマリアにちなんだ「お守り」——明るいブルーのリボン——を身につけることになっていた。この点で、ヴァントラの教団はブーラン教団などと共に「マリア派異端」とひとくくりにできるような側面を備えている。

「慈悲の御業」は教団設立直後から教会や世俗権力から、猛烈な弾圧を受けた。もちろん「慈悲の御業」の教理には正統キリスト教とは相容れない数々の教理が含まれていたことは確かだ。しかし、それだけでなく、セクトのもつ政治性が問題となった。「慈悲の御業」創立時の中心メンバーには、ナウンドルフ派、つまりナウンドルフ Charles-Guillaume Naundorff (v. 1785-1845) を、タンプル

牢獄から脱出して生き残った王太子ルイ 17 世 Louis XVII, Louis-Charles de France (1754-1795) と信じ、ルイ王朝の復辟をはかる正統王党派が多く含まれており、彼らは、7 月革命でフランス王となったルイ＝フィリップ Louis-Philippe 1^{er} de France (1773-1850) を王位の篡奪者だとみなしていた²²。また、これもブーランのセクトと共通するが、教団には、内部で風俗を壊乱するいかがわしい行為が行われているという風聞がつかまっていた。

1841 年 11 月 8 日、バイルーの司教が教区の聖職者にあてて、カトリック教会の教えと信仰に反する原則を流布するために設立された「異端の宗教団体」を非難する書簡を送付した。1843 年 11 月 8 日、教皇グレゴリウス 16 世 Gregorius XVI (fr: Grégoire XVI, 1765-1846) は教皇書簡を発して、ヴァントラとナウンドルフを破門する。ルイ＝フィリップの政府も迅速に動いた。1842 年 4 月 8 日、教団本部に憲兵と王室検事を派遣してヴァントラとフェルナン・ジェフロアを逮捕させ、5 年の懲役刑に処したのである。既に「異端」という罪は消滅していたので、詐欺と公金横領の罪である。服役後も、教団に対する迫害はつづいた。1848 年 5 月 25 日「預言者」は刑務所を出るとベルギー、ついでロンドンへと長い亡命生活を強いられた。教祖の亡命中、教団は「^{セプテナーズ}七人組」と呼ばれる細胞を組織し、地下に潜って布教を続けた。分派運動、内輪もめ、側近の裏切り、中傷、告発等々の波乱にもめげず、ヴァントラは 1875 年、リヨンで生涯を閉じるまで、次々に訪れる神からの新たな「啓示」を取り込みながら教団の教義や儀式を拡充しつづけた。

VII.

ブーランがユージェヌ・ヴァントラと会ったのは、従って、ティリーの預言者の死の直前である。最初は 8 月 13 日、ブリュッセルで。2 度目は 10 月 26 日、パリで。この 2 回目の面会の際、ヴァントラはブーランに「奇跡の聖餅」を幾つか与えた。アジャンの悪魔つき事件²³に由来し、表面にさまざまな血の文様が浮かび上がって、贖罪と悪魔祓いに効果があるという曰くつきの代物だ。ヴァントラは 1841 年以來、彼の周囲の人間にこの聖餅を与えていた。ブーランの場合も、単なる自分の信奉者に対する儀礼的な贈り物のつもりだったのだろう。しかし、1875 年の 12 月ヴァントラが死ぬと、ブーランは、ジョゼフィーヌ・ランシエ Joséphine Lancier という名の幻視者が、天からのお告げを受け、自分がヴァントラの後継者に指名されたと主張しだした。そして、1877 年 1 月、リヨンに居をさだめると、ヴァントラの教義を従来の自らの教義に組み入れたうえ、自分がヴァントラに代わって、新しい預言者エリアに昇格したとして、ジャン・バティスト（「洗礼者ヨハネ」という意味がある）という「司教」名を名乗って、「エリアのカルメル会」という新しい教団を設立した。「慈悲の御業」の大部分のメンバーはブーランのこの動きに同調することはなかった。本家の「慈悲の御業」は、19 世紀の終わりまで、パリなどを中心に細々と命脈を保っていたようだ。一方、ブーランは当初、フランソワ＝ウルス・ソワデルケルク François-Ours Soiderquelk なる男の家に寄宿していたが、1884 年からパスカル・ミスム Pascal Misme という名の建築家の家に移り住むようになり、数人の信者からなる小教団を維持していた。その中に後に、ユイスマンスの小説の主要登場人物バヴォワル夫人のモデルとなり、また、作家の実生活において彼の家政婦となるジュリー・ティボー Julie Thibault がいた。

それでは、ブーランがヴァントラから引き継ぎ、自分の体系に包摂した「慈悲の御業」とは、いか

なる教理をもっていたのか、次稿以降、我々は、この教理の内実について検討し、ついで、それがユイスマンスの文学の中に、どのように取り入れられ、また、昇華されたかを逐次検討していきたい。

註

- 1 この論考は筆者が現在執筆中のユイスマンスに関する研究書『ユイスマンスとオカルティズム（仮題）』（新評論社より近刊予定）を構成する1章として構想されたものをもとに、加筆・修正したものである。この論考の主題である「ブーラン元神父」に関して、筆者は、過去の論文の中でもたびたび言及し、その教理についても部分的に紹介しているが、その情報はいずれも断片的なものにとどまり、ブーランとその教理、ユイスマンスに及ぼした影響について、日本語で詳細に論じるのは今回が初めてである。
- 2 『彼方』*Là-Bas*, Gallimard, Coll. «Folio», 1985. に付された、イヴ・エルサン作成の「事項索引」による。以降、『彼方』の引用は同版による。
- 3 19世紀における聖母マリアの「出現」については、拙稿「オカルト現象としての聖母マリアーオカルトの世紀と聖母マリア（その2）—」、『学苑』平成18年11月号、昭和女子大学、(46)-(55) ページ、を参照。
- 4 この人物に関してはすでに多くの著作や論文が書かれている。この Charles Sauvestres, «L'Œuvre de la Réparation des Âmes. — Procès correctionnel. — Escroquerie.», dans *Les Congrégations religieuses dévoilées*, E. Dentu, 1879, pp. 115-120.; Joanny Bricaud, *J.-K. Huysmans et le satanisme*, Chacornac, 1912.; —, *Huysmans occultiste et magicien*, Chacornac, 1913; (Les deux études sont réunies dans: Joanny Bricaud, *Huysmans et Satan*, M. Reinhard, Coll. «Essais de sciences maudites», 1980.); —, *L'abbé Boullan (Dr Johannès de «Là-Bas»), sa vie, sa doctrine et ses pratiques magiques*, Chacornac, 1927; Article non signé, «Boullan (Joseph-Antoine), prêtre aberrant», in M. Prevost et Roman Amat (dir.), *Dictionnaire de Biographie Française*, Letouzey et aîné, 1954. Vol. 31, p. 1362.; Robert Baldick, *La vie de J.-K. Huysmans*, Denoël, 1958.; Marcel Thomas, «Un aventurier de la mystique: l'abbé Boullan», in *La Tour Saint-Jacques*, VIII, 1963, pp. 116-161.; Jean Jacquinet, «Un Procès de l'Abbé Boullan», in *La Tour Saint-Jacques*, VIII, 1963, pp. 206-216.; Maurice M. Belval, *Des Ténèbres à la Lumière, Étapes de la pensée mystique de J.-K. Huysmans*, G.-P. Maisonneuve & Larose, 1968.
- 5 ただしこれはブーラン自身の証言であり、ロバート・バルディック以下、現代の研究者はこの点には疑義を呈している。
- 6 *Vie divine de la Très Sainte Vierge Marie, ou Abrégé de la Cité Mystique*, d'après Marie de Jésus Agreda; par le P. Bonaventure de Cæsare, M. C. consultant, de la Sacrée congrégation romaine de l'Index; traduite et augmentée d'une Notice par l'abbé Joseph-Antoine Boullan, docteur en théologie. Paris, Lecoffre, éditeur, 1854.
- 7 アグレダのマリアは、1623年に『神の都市』の執筆を始め、43年に一旦この著作を完成するが、聴罪司祭の命により45年に、他の作品と共に焼き捨てている。その後、1651年になって、再び同名の書物を執筆し、1660年に完成した。マドリッドで最初の版が出たのは1670年のことであり、最初のフランス訳が出版されたのは1691年である。
- 8 M. M. Belval, *op. cit.*, p. 74.; J. Bricaud, *L'abbé Boullan*, p. 8.
- 9 ジョアニ・ブリコーによれば、1854年のブーランのパリ行きは、修復礼拝女子修道院の創立者から、彼女が経営する修道院の男子部をつくるのを懇請されたのに応え、長期滞在したにすぎず、ブーランはこの計画が頓挫した後、1855年に、トロワ＝ゼビの修道院の上長者に任命されたのだという。いずれにせよ、ブーランは1856年には、最終的にパリに移り住むことになる。
- 10 ラ・サレットにおける聖母マリア「出現」については拙稿「サレットの“異端”と19世紀末の意味—オカル

- ティズムと聖母マリア (その3)―」、『学苑』平成19年3月号, 昭和女子大学, (41)–(51) ページ, を参照。
- 11 拙稿「オカルト現象としての聖母マリアーオカルトの世紀と聖母マリア (その2)―」、『学苑』平成18年11月号, 昭和女子大学, (46)–(55) ページ。特に (47)–(48) ページを参照。
- 12 J. Bricaud, *L'abbé Boullan*, p. 12.
- 13 L'abbé J.-M. Curicque, *Voix Prophétiques ou Signes, apparitions et prédictions modernes touchant les grands événements de la Chrétienté au XIX^e siècle et vers l'approche de la fin des temps*, 5^e éd., tome II, Paris, Victor Palmé, 1872, pp. 466–470
- 14 反宗教改革期のフランスの聖職者, 教会博士。ジュネーヴ司教を務めたほか、『献身生活序説』*Introduction à la vie dévote* (1608) などの著作がある。
- 15 *Annales du Sacerdoce*, 1859.
- 16 Ch. Sauvestre, *op. cit.*, p. 118.
- 17 Ch. Sauvestre, *op. cit.*, p. 120.
- 18 *Les Annales de la Sainteté au XIX^e siècle*, Société d'ecclésiastiques et de religieux, 12 vols., 1869–1875
- 19 M. M. Belval, *Des Ténèbres à la Lumière*, p. 77.
- 20 Richard Griffiths, *Révolution à rebours*, p. 126.
- 21 1830年7月19日に、「愛徳修道女会」の若い修道女カトリーヌ・ラブレエのまえに、「無原罪の御宿り」の姿で、聖母マリアが現れた。この時の聖母の姿をかたどった楕円形のメダルが製造され、カトリック信者の中でこのメダルを身につけることが流行した。このメダルは現在もお製造され、多くの信者の信仰を集めている。
- 22 ナウンドルフについては、以下の拙稿を参照。「ユイスマンスとブーランー発端ーマリア派異端とユイスマンス (その1)―」、『学苑』平成19年5月号, 昭和女子大学, 6 ページ。
- 23 「アジャンの悪魔つき事件」について、ヴァントラの伝記作者、モーリス・ギャルソンはパリ国立図書館で発見された手稿にもとづく、として次のような逸話を伝えている。
- フランス中部のアジャンの町に、悪魔を崇拜し神を冒瀆する数々の所行を目的とする悪魔主義者のグループがあった。集会には悪魔みずからがたびたび姿を現したという。洗礼を受けていない一人の少女が、12歳の時からこのセクトに加わり、教会に行き聖体拝領に用いる聖餅を盗み出す行為を繰り返していた。キリストの魂の宿った聖餅をさまざまな手段で汚した上で悪魔に捧げるためだ。資料には「おぞましい行為の機微をつくして」とあるので乱交など放埒の限りが尽くされたということなのだろう。少女は、時折、善の道にもどろうと、教会で告解しようと試みたが、悪魔は彼女の舌を麻痺させて、悔悛の手段を封じた。こうして25年が過ぎた。くだんの女は、こんどこそ神の信仰にもどろうと決心し、ベロック夫人なる人物に相談した。そこで、ベロック夫人は彼女を小神学校の上長者をつとめるドゥガンという神父に紹介した。悪魔主義のサークルに足を踏み入れることをやめて1年がたち、女に洗礼を受けさせようということになったが、今度も悪魔が邪魔をした。悪魔主義のセクトの祭司を務める、悪の神父が奸計を弄してドゥガン神父にすり替わり、悔悛した女の頭に水をかけたのである。神聖な洗礼は、新たな神への冒瀆となり、悪魔ルシフェルにとりつかれた女は、首を絞められたり、打擲されたり、針で刺されたり、全身をひねられるなど、日夜、悪魔から苦しめられ、苦悶の叫びをあげた。悪魔は、時折、汚された聖餅を砕いて、女の頭や衣服の上にばらまいた。ある日、聖餅の一つから血が流れ出しているのに気づいて、悪魔は叫んだ。「裏切りものめ、俺にキリストの血なんかみせやがって」。女は、毎日ひっきりなしに苦しめられ、身体は完全に麻痺していたが、しばらく前から、悪魔とは別に、彼女の床のそばに形のさだかでない小さな存在が現れるようになった。それは彼女の守護天使だった。悪魔はそれから聖体拝受の秘蹟の際に盗まれ、汚された何千という聖体を女の身体に浴びせ続けた。1838年8月5日、聖母秘昇天祭の日、サタンがやはり何十もの聖体を持ってきたあとで、守護天使が「主よ、すべての

聖体が御許にもどりました」と告げた。まもなく女は激しい苦悶に襲われたが、しばらくすると病床から身を起こして快癒した。

ところで、ベロック夫人、ドゥガン神父をはじめ、悪魔つきの女の周囲の人間はいずれも「慈悲の御業」の信者であり、アジャンの7人組のメンバーだった。事件を聞いたヴァントラは、大天使からアジャンの聖体に対して贖罪の礼拝を行うよう命じられたと主張して、ベロック夫人に聖体を「慈悲の御業」に譲り受けたいと願い出たが、ベロック夫人はきっぱりとこの依頼を断った。すると、ヴァントラは、1841年12月、カッシーニ夫人という信者をアジャンに送り込んで、聖体を二つ盗ませ、一つはティリーに、一つは教団の後援者ラザック男爵の城のあるサント＝ペに送らせた。聖体の「奇跡」は聖体がティリーにやってきてからも続いた。聖体の包みを解くと、聖体の表面には今流れ出したような新鮮な血でハートのマークが浮かび出た。また、聖体はガラスの容器に入れられて保存されていたが、翌1842年3月から、容器のなかに次々に新しい聖体が現れるようになり、この現象はその後もずっと続いた。これらの聖体には、ハートや十字架、アルファベットなど、さまざまな文様や記号が描かれていた。「慈悲の御業」内部の解釈によれば、この「奇跡」はアジャンの奇跡と同様、悪魔主義者によって汚された聖餅が贖罪の祈りを捧げてもらうために「慈悲の御業」のもとに避難してくるのだという。

モーリス・ギャルソンは、この奇跡は、明らかに「慈悲の御業」の作為であり、ヴァントラは以後数十年にわたって「奇跡の聖餅」を偽造しつづけていたと推定している。Cf. Maurice Garçon, *Vintras hérésiarque et prophète*, Lib. Critique Émile Nourry, 1928.

(おおの ひでし 総合教育センター)